

# 防災が広がる家

## 会議スペース

地域による避難計画は入念な打ち合わせと状況把握の上に成り立っている。ここでは、防災拠点でもあり、災害時の避難計画の拠点となる場所でもある。

## 木の製作工房

大規模な災害により、家屋が破損してしまった場合、住民が自ら修繕することが復興への大きな足かりとなる。そのため、この製作工房では、日常から木・工具を用いたワークショップを行うことで、災害時に役に立つ技術を育成する。また、工房内には薪を貯蔵するスペースも内包する。

## 備蓄倉庫

かつての蔵は、防災備蓄倉庫として、非常食や資材などを備蓄する。

## パッシブな炊事設備

井戸やかまどなどの、電気を要しないパッシブな炊事設備は、災害時のインフラ停止状態で重宝される。日常的にこれらの設備を用いることで災害時に誰もが使用することができる。

## 避難スペース

8畳を基本モジュールとした居室は、家族ごとのプライバシーを確保することが可能な避難スペースとなる。障子・襖などの可動性の間仕切りで仕切られているため、状況に応じて、広さを変更することができる。普段は公民館として利用されている。

## まちの食堂

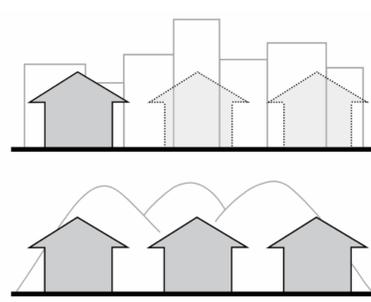
普段は、地域の住民が農作業の合間に訪れたり、町内会の会食などに用いられる食堂のスペースである。災害時には、炊き出しが行われ、非常食などの物資を配給する拠点となる。

## 01. 都市郊外における防災の危険



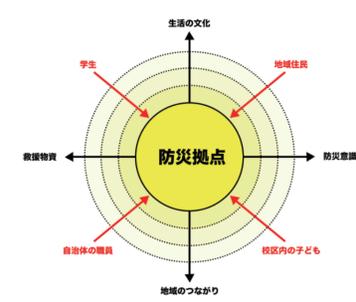
近年、日本において災害が頻発し、防災についての意識が高まっている。中でも、避難時に一番重要といえるのが地域自治体による避難場所の確保や、防災備蓄をはじめとする防災計画だろう。しかし、鳥取県米子市岡成地区のような市街地から離れた集落では防災に対する意識が市街地に比べて薄く、十分な防災計画が練られていない。

## 02. ストック活用の進行



一方、本年6月に公布・施行される建築基準法の改正により、法律上の空き家の用途変更が容易になった。このことから今後、空き家のストック活用が活発化し現在の日本に根付いている空き家問題を快方へと向かわせるかもしれない。しかし、敷地が希薄になりがちな防災意識を高めると共に、地域住民のつながりを強め、お互いに助け合うことのできるコミュニティの形成を目的とする。

## 03. 日常利用できる防災拠点



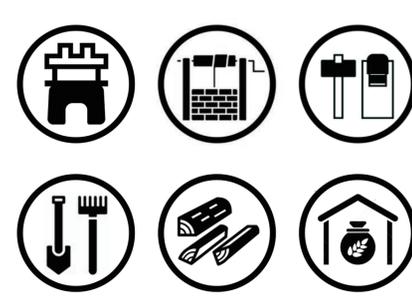
こうした背景から、「空き家を活用した日常利用できる防災拠点」を提案する。都市郊外に数多く存在する使い道のない空き家を、地域住民・地区内の子ども・自治体の職員・学生など様々な人々が日常利用する防災拠点とすることで、狭い集落で希薄になりがちな防災意識を高めると共に、地域住民のつながりを強め、お互いに助け合うことのできるコミュニティの形成を目的とする。

## 04. 堅牢な空き家



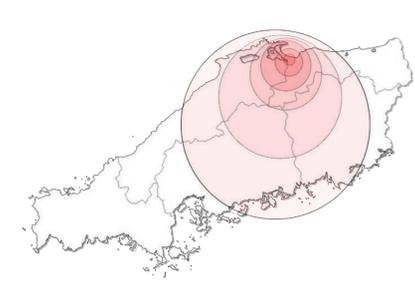
敷地は鳥取県米子市岡成に存する空き家である。この空き家は集落の中でも一際大きく立派な住宅であり、このことから、この敷地が位置している地盤は比較的安定していることが推察される。また、これだけの大きさの住宅が形を変えずに何十年と残っていることが何よりの安全性の証明でもある。住宅の建具や設備は趣のあるものばかりでこれを生かした計画を行う。

## 05. 災害時に役立つスキル育成



近年、住宅のオール電化など、現代の生活の大部分が電力なしでは成り立たなくなっている。そのため、災害時に電力やガスなどの燃料の供給がストップした場合、基本的な生活を行うことが困難になると予想される。そこで、普段から電気・ガスを要しないパッシブな設備を使い、慣れ親しんでおくことで災害時に問題なく設備を使用し、生活水準を保つことができる。

## 06. 空き家活用のモデルとして



この建築は、都市郊外に数多く存在する使い道のない空き家の活用モデルとして、拡散することで、災害時に孤立状態に陥りやすい集落の安全性を高め、地域のつながりを強くすることができる。また、パッシブな手法を使うことのできる若者が増えることで、伝統的な技術や手法の良さが改めて世間に再確認されるチャンスとなり、地域固有の文化の伝承にも繋がる。